

犬の飼育と犬に対する愛着度が
飼い主の身体的健康と精神的健康に及ぼす効果
JGSS-2001 のデータから

杉 田 陽 出
(大阪商業大学経済学部)

The effects of dog ownership and attachment to dogs
on Japanese dog owners' physical and emotional health
From the data of JGSS-2001

Hizuru SUGITA

This study examined two questions: whether dog ownership is a factor to promote Japanese people's health, and whether dog owners' attachment to their dogs influences their health. Physical and emotional health were compared between dog owners and non-owners, and the relations between dog owners' attachment to their dogs and physical and emotional health were analyzed by using the data of JGSS-2001. The results showed that there were no differences between dog owners and non-owners in both of their physical and emotional health, and that dog ownership was not a factor to influence their health. The results also revealed that dog owners' attachment to their dogs influenced their health. For men, dog owners with weak attachment were less physically healthy than non-owners. For women, dog owners with moderately strong attachment were more physically healthy, and dog owners with strong attachment were more emotionally healthy than non-owners.

Key words: JGSS-2001, dogs, health

本稿は、犬の飼育は日本人に健康をもたらす要因であるのか、犬に対する愛着は飼育者の健康に影響を及ぼすのか、という二点について検証している。JGSS-2001 のデータを用いて、犬の飼育者と非飼育者の身体的健康度と精神的健康度が比較され、飼育者の犬に対する愛着度と身体的健康度及び精神的健康度の関係が分析された。データ分析の結果、身体的健康度と精神的健康度の両方において犬の飼育者と非飼育者で差は無く、犬を飼育することは飼育者の健康を決定する要因とならないことが判明した。さらに、犬に対する愛着の度合いは飼育者の健康に影響を及ぼすことが明らかになった。男性では、犬に対する愛着が弱い飼育者は非飼育者よりも身体的健康度が低い。また、女性では、非飼育者に比べて、犬に対する愛着が比較的強い飼育者は身体的健康度が高く、犬に対する愛着が強い飼育者は精神的健康度が高い。

キーワード: JGSS-2001、犬、健康

1. はじめに

日本では現在約 37～38%の家庭でペットが飼育されている(総理府, 2000: 杉田, 2002a)。JGSS-2000 のデータによると、その種類は犬や猫から両生類や爬虫類、あるいはミツバチやザリガニにまで及び、日本人が飼育しているペット動物の多様性がうかがわれる(杉田, 2002a)。一般の家庭において様々なペットが飼育されていることに加えて、日本人のペットに対する意識にも変化が見られる。昨今のペットブームと共に、飼い主の間にはペットは家族の一員であるという認識が広まり、それを反映してか、マスメディアは「人と動物の絆(Human-Animal Bond)」の概念に基づいたペットのしつけ方を頻繁に取り上げている。また、1999年12月には動物愛護法が成立し、翌年からの施行に伴って、法律上でも動物の権利が保護されるようになった。さらに、動物介在療法や動物介在活動の効果が注目され、犬や猫などのペット動物を伴ったボランティアによる老人介護施設への訪問活動の輪が広がりつつある。今やペットは「コンパニオン・アニマル(伴侶動物)」と呼ばれ、人間社会の中の一員としてその地位を確立していると言えよう。しかし、ペットを取り巻く社会環境や人々の意識の変化が著しい反面、日本人とペットの関係に関する学術的調査は極めて少なく、その関係については未解明な点が多く残されている。

一方、欧米では、1970年代以降、獣医学や精神医学、臨床心理学、動物行動学などの様々な分野で、人と動物の関係を科学的に分析し解明しようという研究が行われている。そのテーマは、動物介在療法や動物介在活動の効果、ペット飼育による心臓病患者の生存率、アルツハイマー患者やうつ病患者、あるいは配偶者を亡くした人の健康状態にペットがもたらす効果、ペット飼育が子どもの自己概念形成に与える影響、自閉症の子どもの治療効果、ペットの存在が未知の人との相互作用に及ぼす影響など、多岐に亘っている。これらの研究によって、動物が人に与える効果は、生理的效果、心理的效果、社会的効果に分類されることが明らかにされた(Beck & Meyers, 1996: 横山, 1996)。また、これらの研究の中には、ペット飼育の有無による比較という方法で動物がもたらす効果について検証したものが多く、ペットを飼育していない人に比べて、飼育している人の方が身体的にも精神的にも健康であるという結果が導き出されている(e.g. Friedmann et al., 1980: Akiyama et al., 1986-7: Siegel, 1990: Serpell, 1991: Anderson et al., 1992: Friedmann & Thomas, 1995: Fritz et al., 1995: Jessen et al., 1996)。しかし、同時に、ペット飼育者と非飼育者間で身体的及び精神的な健康に差はないという結果も報告され、人の健康に影響を及ぼすのはペット飼育の有無という要因だけではないという観点に基づいて、調査対象者の属性や人間関係、ペットに対する愛着度などの要因との関係から調査を行ったものも数多い(e.g. Stallones et al., 1989: Miller & Lago, 1990: Watson & Weinstein, 1993: Staats & Horner, 1999)。例えば、Ory & Goldberg (1983) は、65歳から75歳の1,073人の既婚女性を対象に、ペット飼育の有無、ペットに対する愛着度と幸福感の関係を調査し、ペットに対する愛着が強い飼育者の幸福度が最も高く、ペットに対する愛着が弱い飼育者の幸福度は非飼育者を下回って最

も低いという結果を得た。また、Garrity et al. (1989) は、65 歳以上の 1,232 人を対象にしてペット飼育の有無、ペットに対する愛着度、親友の数と身体的健康及び精神的健康の関係を調査し、ペット飼育の有無は身体的及び精神的な健康に影響を及ぼさないこと、ペットに対する愛着の強さは精神的苦痛の低下に影響すること、親友が少ない人にとっては、ペット飼育とペットに対する愛着の強さがうつ病の低下に結びつくことを報告した。これらの調査結果は、ペットに対する愛着の強さ、あるいは家族や友人などの人間関係の有無が健康を高める要因となることを提示しており、ペットの持つ効果が発揮される背景には、人とペットの結びつきの強さやネットワークの有無など、複数の要因が絡み合っていることがわかる。

本稿は、欧米における先行研究の結果を踏まえて、ペット飼育の有無とペットに対する愛着度という二つの要因に着目した。そして、JGSS-2001 のデータ分析を基に、日本の家庭で飼育されているペットは飼育者の身体的健康と精神的健康を高める要因となるのか、飼育者のペットに対する愛着の度合いは身体的健康と精神的健康に影響を及ぼす要因となるのか、という二点について検証し、欧米人を対象とした調査結果と比較しつつ、日本人とペット動物の関係を解明することを目的としている。

2. 方法

2.1 JGSS-2001

本調査を行うにあたり、大阪商業大学比較地域研究所と東京大学社会科学研究所の共同プロジェクトである日本版 General Social Surveys (JGSS) の第 2 回本調査である JGSS-2001 のデータを用いた。JGSS-2001 は、平成 13 (2001) 年 10 月下旬から 11 月下旬にかけて、層化二段無作為抽出法により全国の 13 大都市を含む計 18 の市町村郡 300 地点から抽出された、20 歳から 89 歳までの男女 4,500 人を対象に実施された。有効サンプル数 4,473 人の内、有効回答者数は 2,790 人であった (回収率 62.4%)。JGSS-2001 の設問項目は、調査対象者の属性、政治意識、人生観、余暇活動など多岐に亘り、ペットに関する設問項目として、現在のペット飼育の有無、現在飼育しているペットの種類 (複数回答)、ペットに対する意識、そして一日にペットと過ごす時間が尋ねられた。

2.2 被験者

JGSS-2001 における有効回答者数 2,790 人の内、「現在ペットを飼育していない」と回答したのは 20 歳から 89 歳までの 1,755 人 (男性 801 人、女性 954 人) であり、「現在ペットを飼育している」と回答したのは 20 歳から 89 歳までの 1,034 人 (男性 481 人、女性 553 人 : ペット飼育率 37.1%) であった。「現在ペットを飼育している」と回答した人が飼育しているペットの種類 (複数回答) は、「室外犬」が 417 人 (40.3%)、「室内犬」が 222 人 (21.5%)、「猫」が 284 人 (27.5%)、「ウサギやハムスターなどの小型ほ乳類」が 111

人(10.7%)、「小鳥やニワトリなどの鳥類」が106人(10.3%)、「熱帯魚や金魚などの魚類」が210人(20.3%)、「カエル・カメ・トカゲなどの両生類・は虫類」が60人(5.8%)、「昆虫類」が30人(2.9%)、「その他」が6人(0.6%)であった。

今回の調査では、次にあげる三つの理由から、「現在ペットを飼育している」と回答した1,034人の内、犬のみを飼育している回答者をペット飼育者を選んだ。まず、犬は動物介在療法や動物介在活動に使われる頻度が高い(Mallon, 1994)ことに加えて、人と動物の関係に関する先行研究では、人と犬との相互作用を取り上げたものが他の動物に比べて多く、その結果が「動物は人の身体や精神の健康にプラスの効果をもたらす」という概念の確立に大きく影響していると考えられる。次に、犬のみを飼育している回答者を対象とすることによって、複数種の飼育動物による複合的な健康への影響を避けるという目的がある。第2回予備調査やJGSS-2000と同様に、JGSS-2001においても、現在飼育しているペットの種類に関する設問項目は複数回答となっており、複数の種類のペットを飼育している家庭が少なからず存在していることが明らかにされている。しかし、そのような家庭においては、どのペット動物が飼育者の健康に影響を及ぼしているのが特定することが難しい。したがって、単一種のペット動物の飼育者を調査対象とすることが望ましいと判断した。さらに、第三の理由として、犬は日本人に最も多く飼育されているペット動物である(総理府, 2000; 杉田, 2002a)ことがあげられる。JGSS-2001のデータ分析においても、犬を飼育している人に比べて、他のペット動物を飼育している人は少数であり、分析を行う上で困難が予測された。以上の三つの理由から、今回の調査では、「現在ペットを飼育している」と回答した1,034人の中から、犬以外のペット動物を飼育している回答者と犬を飼育しているが同時に他の種類のペット動物を飼育している回答者を除き、犬のみを飼育している428人(男性206人、女性222人)⁽¹⁾をペット飼育者とした。そして、「現在ペットを飼育していない」と回答した1,755人の非飼育者との身体的健康度と精神的健康度の差を比較した。

2.3 設問項目

本調査では、JGSS-2001の性別、年齢、就業や婚姻の有無、家族構成、世帯年収、社会階層意識、生活習慣に関する設問を用いた他、身体的健康度と精神的健康度、そして犬に対する愛着度を表わす変数を作成するにあたって、現在の健康状態、生活面の満足度、幸福感、そしてペットに関する設問項目を用いた。

2.3.1 身体的健康度

身体的健康度を表わす変数に関しては、現在の健康状態を尋ねた設問を用いた。JGSS-2001における現在の健康状態に関する設問「あなたの現在の健康状態は、いかがですか」に対しては、両端にのみ「良い(=1)」と「悪い(=5)」という用語が付けられ

た1から5までのカテゴリーが選択肢として与えられている。本調査では、1を5 (= 良い)、2を4、3を3、4を2、5を1 (= 悪い)の数値に置き換えて、被験者の身体的健康度変数とした。

2.3.2 精神的健康度

精神的健康度を表わす変数に関しては、Raina et al. (1999)の調査を参考にして、生活面の満足度と幸福感を尋ねた設問を用いた。Raina et al. (1999)は、ペット動物が老人の身体的健康と心理的健康に及ぼす影響を調査した研究の中で、健康、仕事、主な活動、経済状態、住居、家族関係、友人関係、生活全般に対する満足度と幸福感、そして精神的健康に関する各設問に対する回答の数値を合計して心理的健康度を表わす変数としている。JGSS-2001では、生活面の満足度に関する設問として、「住んでいる地域」、「余暇の過ごし方」、「家庭生活」、「現在の家計の状態」、「友人関係」、「健康状態」の六項目があり、各項目の選択肢として、両端にのみ「満足 (= 1)」と「不満 (= 5)」という用語が付けられた1から5までのカテゴリーが与えられている。また、幸福感に関する設問「あなたは、現在幸せですか」に対しては、両端にのみ「幸せ (= 1)」と「不幸せ (= 5)」という用語が付けられた1から5までのカテゴリーが選択肢として与えられている。生活面の満足度に関する六項目と幸福感に関する設問について、選択肢の1を5 (= 満足/幸せ)、2を4、3を3、4を2、5を1 (= 不満足/不幸せ)の数値に置き換えて、七項目の信頼性を分析した結果、クロンバックのアルファ値は.82であった。また、因子分析を行った結果、一つの因子が検出された。したがって、本調査では、生活面の満足度に関する六項目と幸福感の設問に対する回答の合計値を精神的健康度変数とした⁽²⁾。

2.3.3 犬に対する愛着度

犬に対する愛着度を表わす変数に関しては、ペットに対する意識を尋ねた設問を用いた。JGSS-2001のペットに対する認識に関する設問では、「気持ちをなごませてくれる」、「生活にはりあいを与えてくれる」、「孤独感や寂しさを癒してくれる」、「世話をすることで、規則正しい生活ができる」、「ペットは自分を必要としてくれる」、「家族とのコミュニケーションに役立つ」、「生きがいである」、「ペットを通じて人間関係が広がる」の八つの項目について、「強くそう思う (= 1)」、「そう思う (= 2)」、「少しはそう思う (= 3)」、「そうは思わない (= 4)」の四つのカテゴリーが選択肢として与えられている。それぞれの項目について、1を4 (= 強くそう思う)、2を3 (= そう思う)、3を2 (= 少しはそう思う)、4を1 (= そうは思わない)という数値に置き換えて、犬の飼育者を対象に八項目の信頼性を分析した結果、クロンバックのアルファ値は.91であった。また、因子分析の結果、一つの因子が検出された。JGSS-2001のペットに対する意識に関する設問項目は、Miller-Radaのペット愛着度スケール (Staats et al., 1996)を基に作成されていることから、

本調査では、検出された因子を犬に対する愛着度とし、八項目の数値を合計したものを犬に対する愛着度変数とした。

2.4 分析

データ分析を行うにあたり、統計ソフト SPSS を使用した。調査対象者の犬の飼育の有無と属性との関連はピアソンのカイ2乗を、犬の飼育の有無による身体的健康度と精神的健康度の平均値の比較についてはT検定を、犬に対する愛着度と身体的健康度及び精神的健康度の関係についてはピアソンの相関係数を用いて分析した。また、有意水準値は5%に設定した。

3. 結果

3.1 ペット飼育の有無と健康

表1 属性と生活習慣別に見た犬の飼育者と非飼育者の人数と割合

	飼育者 428 人	非飼育者 1755 人	
性別			n.s
男性	206 人 (48.1%)	801 人 (45.6%)	
女性	222 人 (51.9%)	954 人 (54.4%)	
年齢			p=.001
20代	54 人 (12.6%)	209 人 (11.9%)	
30代	41 人 (9.6%)	254 人 (14.5%)	
40代	80 人 (18.7%)	239 人 (13.6%)	
50代	112 人 (26.2%)	368 人 (21.0%)	
60代	77 人 (18.0%)	339 人 (19.3%)	
70歳以上	64 人 (15.0%)	346 人 (19.7%)	
就業の有無			p<.05
有職	274 人 (64.0%)	1014 人 (57.8%)	
無職	154 人 (36.0%)	741 人 (42.2%)	
婚姻の有無			n.s.
未婚	63 人 (14.7%)	269 人 (15.3%)	
既婚 ⁽³⁾	365 人 (85.3%)	1486 人 (84.7%)	
同居家族人数			p<.001
0人	17 人 (4.0%)	187 人 (10.7%)	
1人	90 人 (21.0%)	541 人 (30.8%)	
2人	89 人 (20.8%)	395 人 (22.5%)	
3人	107 人 (25.0%)	328 人 (18.7%)	
4人以上	125 人 (29.2%)	304 人 (17.3%)	
子どもの数 ⁽⁴⁾			p=.001
0人	91 人 (21.3%)	418 人 (23.8%)	
1人	45 人 (10.5%)	266 人 (15.2%)	
2人	164 人 (38.3%)	691 人 (39.4%)	
3人以上	127 人 (29.7%)	376 人 (21.4%)	
無回答	1 人 (0.2%)	4 人 (0.2%)	

住居形態			p<.001
一戸建て	405人 (94.6%)	1283人 (73.1%)	
集合住宅	22人 (5.1%)	465人 (26.5%)	
その他	1人 (0.2%)	4人 (0.2%)	
無回答	0人 (0.0%)	3人 (0.2%)	
世帯年収			p<.001
250万円未満	30人 (7.0%)	217人 (12.4%)	
550万円未満	63人 (14.7%)	417人 (23.8%)	
1000万円未満	101人 (23.6%)	359人 (20.5%)	
1000万円以上	59人 (13.8%)	196人 (11.2%)	
わからない	128人 (29.9%)	341人 (19.4%)	
回答拒否	45人 (10.5%)	212人 (12.1%)	
無回答	2人 (0.5%)	13人 (0.7%)	
社会階層意識			n.s.
上・中の上	47人 (11.0%)	190人 (10.8%)	
中	204人 (47.7%)	842人 (48.0%)	
中の下・下	164人 (38.3%)	702人 (40.0%)	
無回答	13人 (3.0%)	21人 (1.2%)	
喫煙習慣の有無			p<.01
有り	148人 (34.6%)	480人 (27.4%)	
無し	277人 (64.7%)	1262人 (71.9%)	
無回答	3人 (0.7%)	13人 (0.7%)	
飲酒頻度			n.s.
全く無し	117人 (27.3%)	527人 (30.0%)	
年1回～数回	63人 (14.7%)	285人 (16.2%)	
月1回～週1回	83人 (19.4%)	342人 (19.5%)	
週数回	65人 (15.2%)	240人 (13.7%)	
ほとんど毎日	98人 (22.9%)	352人 (20.1%)	
無回答	2人 (0.5%)	9人 (0.5%)	
トラウマの数			p<.05
0回	171人 (40.0%)	752人 (42.8%)	
1回	112人 (26.2%)	492人 (28.0%)	
2回	76人 (17.8%)	270人 (15.4%)	
3回	46人 (10.7%)	121人 (6.9%)	
4回以上	22人 (5.1%)	111人 (6.3%)	
無回答	1人 (0.2%)	9人 (0.5%)	
家族そろっての 夕食の頻度			n.s.
全く無し	18人 (4.2%)	130人 (7.4%)	
年1回～数回	22人 (5.1%)	100人 (5.7%)	
月1回～週1回	58人 (13.6%)	230人 (13.1%)	
週数回	97人 (22.7%)	369人 (21.0%)	
ほとんど毎日	231人 (54.0%)	911人 (51.9%)	
無回答	2人 (0.5%)	15人 (0.9%)	
友人との会食や 集まりの頻度			n.s.
全く無し	45人 (10.5%)	225人 (12.8%)	
年1回～数回	172人 (40.2%)	687人 (39.1%)	
月1回～週1回	182人 (42.5%)	707人 (40.3%)	
週数回	23人 (5.4%)	101人 (5.8%)	
ほとんど毎日	4人 (0.9%)	20人 (1.1%)	
無回答	2人 (0.5%)	15人 (0.9%)	

表1は調査対象者の性別、年齢、就業の有無、婚姻の有無、同居家族人数、子どもの数、住居形態、世帯年収、社会階層意識といった属性に加えて、身体的健康と精神的健康に影響を及ぼすと考えられる要因として喫煙習慣の有無と飲酒の頻度、過去5年間に経験したトラウマの数、家族や友人とのかかわりの頻度といった生活習慣に関する項目別に、犬の飼育者と非飼育者の人数と割合を表示している。また、それぞれの項目について、犬の飼育の有無との関連をピアソンのカイ2乗で検定した結果も表示している。この表からは、犬の飼育者は、非飼育者に比べて、就業の割合、同居世帯人数と子どもの数、一戸建てに住んでいる割合、世帯年収、喫煙習慣の割合が多い傾向があり、婚姻状態、社会階層意識、飲酒頻度、家族や友人とのかかわりの頻度については、飼育者と非飼育者であまり違いはないことがうかがわれる。

表2は犬の飼育者と非飼育者の身体的健康度の平均値を、表3は精神的健康度の平均値を男女別、年代別に表示している。飼育者と非飼育者の身体的健康度と精神的健康度の平均値の差をT検定で分析した結果、男女共に身体的健康度と精神的健康度の両方において差は認められなかった。また、年代別における差も男女共に認められなかった。

表2 身体的健康度の平均値

	飼育者			非飼育者		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
20代	3.8	3.7	3.8	3.8	3.8	3.8
30代	3.6	3.7	3.7	3.4	3.6	3.5
40代	3.2	3.5	3.4	3.5	3.4	3.4
50代	3.4	3.5	3.5	3.4	3.6	3.5
60代	3.3	3.1	3.2	3.4	3.2	3.3
70歳以上	2.6	3.2	3.0	3.0	3.1	3.0
合計	3.3	3.4	3.4	3.4	3.4	3.4

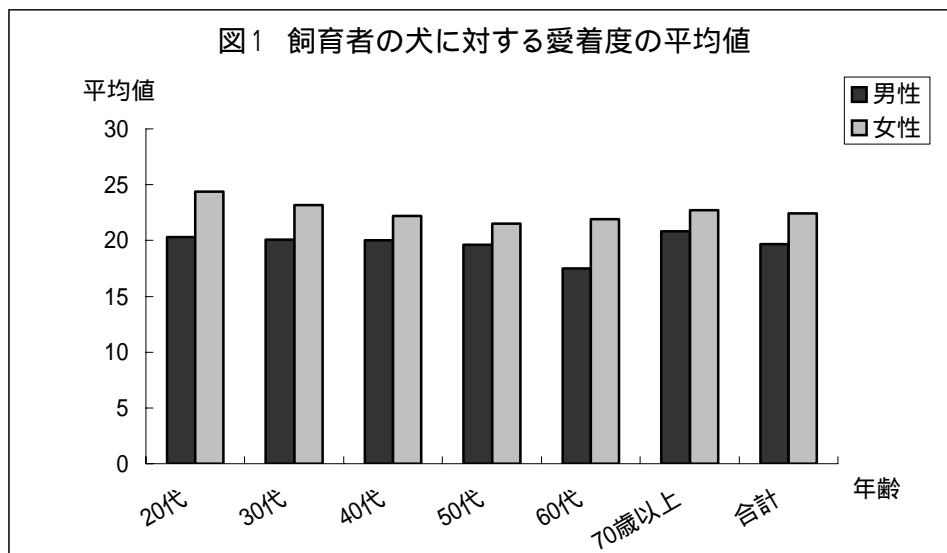
表3 精神的健康度の平均値

	飼育者			非飼育者		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
20代	23.0	26.2	24.3	24.5	25.4	24.9
30代	22.9	24.8	24.0	23.8	23.8	23.8
40代	22.9	23.9	23.5	23.2	23.8	23.5
50代	24.2	25.0	24.5	24.1	24.2	24.1
60代	23.8	24.5	24.2	24.1	23.9	24.0
70歳以上	25.2	26.3	25.8	24.4	25.3	24.9
合計	23.7	25.0	24.4	24.0	24.4	24.2

3.2 飼育者の犬に対する愛着度と健康

男女共に、飼育者の犬に対する愛着度の最小値は8、最大値は32であった。平均値は男性で19.7、女性で22.4であり、T検定の結果、男女間で有意差が認められた ($p < .001$)。また、年代別に犬に対する愛着度の平均値を見ると(図1参照)、20代では男性20.3、女性24.4 ($p < .01$)、30代では男性20.1、女性23.2、40代では男性20.0、女性22.2、50代では男性19.6、女性21.5、60代では男性17.5、女性21.9 ($p < .01$)、70歳以上では男性

20.8、女性 22.7 であった。全ての年代において有意差は認められないものの、女性の平均値が男性の平均値を上回っており、男性よりも女性の方が飼育している犬に対して強い愛着を感じていることがわかる。また、分散分析の結果によると、年齢による犬に対する愛着度の差は男女共に認められなかった。



ピアソンの相関係数を用いて、犬に対する愛着度と身体的健康度及び精神的健康度との相関関係を分析したところ、男性では、身体的健康度と精神的健康度の両方で有意な相関関係が認められた ($r=.167, p<.05$; $r=.224, p<.01$)。女性では、身体的健康度との間に有意な相関関係は認められなかったものの、精神的健康度との間に有意な相関関係が認められた ($r=.156, p<.05$)。すなわち、男性では、犬に対する愛着が強い飼育者ほど身体的健康度と精神的健康度が増し、女性では、犬に対する愛着が強い飼育者ほど精神的健康度が増す。

犬に対する愛着は男性よりも女性の方が強いが、T 検定の結果では、身体的健康度と精神的健康度に差は認められなかった。しかし、年代別に見ると、身体的健康度については 70 歳以上で ($p<.05$) 精神的健康度については 20 代で ($p<.05$) 有意差が認められ、共に女性の健康度が高い。

では、犬に対する愛着の強さにより飼育者と非飼育者との間に健康の差は見られるのであろうか。この点を検証するために、パーセンタイル値を用いて、飼育者を犬に対する愛着の度合い別に四つのグループに分類した。愛着度が 8 から 17 (パーセンタイル値 25) までを「犬に対する愛着が弱い飼育者」(男性 74 人、女性 48 人)、18 から 21 (パーセンタイル値 50) までを「犬に対する愛着が比較的弱い飼育者」(男性 44 人、女性 49 人)、22 から 26 (パーセンタイル値 75) までを「犬に対する愛着が比較的強い飼育者」(男性 47 人、女性 60 人)、27 から 32 (パーセンタイル値 100) までを「犬に対する愛着が強い飼育者」(男

性 27 人、女性 55 人)とした。表 4 はそれぞれのグループの身体的健康度と精神的健康度の平均値を表示している。身体的健康度と精神的健康度について、それぞれのグループの平均値と非飼育者の平均値を T 検定で比較した結果、男性では、犬に対する愛着が強い飼育者と非飼育者の間に身体的健康度の有意差が認められた ($p < .05$)。また、女性では、犬に対する愛着が比較的強い飼育者と非飼育者の間に身体的健康度の有意差が認められた ($p < .05$)、犬に対する愛着が強い飼育者と非飼育者の間に精神的健康度の有意差が認められた ($p < .01$)。すなわち、非飼育者に比べて、男性では、犬に対する愛着が弱い飼育者は身体的に不健康であり、女性では、犬に対して比較的強い愛着を感じている飼育者は身体的に健康であり、犬に対する愛着が強い飼育者は精神的に健康である。

飼育者同士の間にも、ペットに対する愛着の強さによる健康度の差が認められた。分散分析の結果、女性の精神的健康度の平均値に有意差が認められ、犬に対する愛着が強い飼育者は、犬に対する愛着が比較的弱い飼育者よりも精神的に健康である ($p < .05$)。また、性別による差に関しては、T 検定の結果、犬に対する愛着が弱い飼育者で有意差が認められ、女性の方が男性よりも健康である ($p < .05$)。

表 4 犬に対する愛着度による身体的健康度と精神的健康度の平均値

	身体的健康度			精神的健康度		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
犬に対する愛着度						
強い	3.7	3.2	3.4	25.4	26.5	26.2
比較的強い	3.5	3.7	3.6	24.0	24.8	24.5
比較的弱い	3.1	3.3	3.2	23.9	23.5	23.7
弱い	3.3	3.4	3.3	22.7	24.7	23.5

4. 考察

データ分析により、次の結果が得られた。非飼育者に比べて、犬の飼育者は就業の割合、同居世帯人数と子どもの数、一戸建てに住んでいる割合、世帯年収、喫煙習慣の割合が多い傾向があり、婚姻状態、社会階層意識、飲酒頻度、家族や友人とのかかわりの頻度についてはあまり違いはない。身体的健康度と精神的健康度については、男女共に犬の飼育者と非飼育者で差が無い。飼育者の犬に対する愛着度と身体的健康度及び精神的健康度は相関関係があり、男性では、犬に対する愛着が強いほど身体的健康度と精神的健康度は向上し、女性では、犬に対する愛着が強いほど精神的健康度は向上する。犬に対する愛着は男性に比べて女性の方が強いが、男女間で身体的健康度と精神的健康度にほとんど差はない。また、非飼育者に比べて、男性では、犬に対する愛着が弱い飼育者は身体的健康度が低く、女性では、犬に対する愛着が比較的強い飼育者は身体的健康度が高く、犬に対する愛着が強い飼育者は精神的健康度が高い。さらに、飼育者同士でもペットに対する愛着の強さによって精神的健康度に差があり、女性では、犬に対する愛着が比較的弱い飼育者に比べて、犬に対する愛着が強い飼育者は精神的健康度が高く、犬に対する愛着が弱い飼育者では、

女性の方が男性よりも精神的健康度が高い。以上の結果から、犬を飼育することは健康を高める要因とはならないこと、犬に対する愛着の度合いは身体的健康と精神的健康に影響し、飼育者と非飼育者、さらには飼育者同士で健康度の差を導く要因となること、男性と女性ではペットに対する愛着の強さが身体的及び精神的健康に及ぼす影響が異なることが明らかになった。

まず、犬の飼育者と非飼育者の属性について、一戸建てに住んでいる人で犬の飼育の割合が多いのは、日本の集合住宅ではペットの飼育が禁止されているところが多いという現状を反映した結果であろう。総理府（2000）の調査報告によると、ペット非飼育者がペットを飼わない理由として、「十分に世話ができないから」（43.5%）、「死ぬとかわいそうだから」（37.6%）に続いて、「集合住宅（アパート、マンションなど一戸建てでないもの）であるから」（23.1%）という項目があげられている。特に犬の場合は、吠え声や臭い、排泄行為、飼育スペースといった問題が生じやすい（井本, 2001）。ペット対応型マンションが増えつつあるとはいえ、やはり集合住宅での犬の飼育は難しいのであろう。

同居している家族や子どもの多い家庭で犬を飼っている割合が多いという点については、犬を飼うきっかけが家族や子どものためであったということによるところが大きいように思われる。総理府（2000）の飼育者がペットを飼うようになった理由を調査した結果では、「家族が動物好きだから」（57.2%）、「子どもの情操教育のため」（21.2%）という項目が上位を占めている。また、家族や子どものために犬を飼うようになったことに加えて、家族の人数が少ない家庭では、世話の問題や飼育にかかる費用の問題が生じやすいことも影響していると推察される。

就業をしており世帯年収が多い家庭で犬が飼育されているという結果については、餌や予防接種、あるいは避妊手術など、犬の飼育に費用がかかるためと考えられる。しかし、非飼育者に比べて犬の飼育者の世帯年収が多いのにもかかわらず、社会階層意識について両方で違いが見られないのは、犬を飼っている人では、世帯年収が必ずしも社会階層意識に結びついていないということである。

家族や友人とのかかわり度に関して、犬を飼っている人と飼っていない人で差がないという結果については、考察を加えることが難しい。動物が人にもたらす効果には、生理的効果と心理的効果に加えて、社会的効果があげられる（Beck & Meyers, 1996: 横山, 1996）。社会的効果とは、動物の存在が周囲の人との相互作用を促進し、人間関係を広げる効果のことである（杉田, 1999）。Hart et al. (1987) は車椅子に乗っている人が犬を連れている場合と連れていない場合を比較実験して、犬を連れている人の方が未知の人から話しかけられる頻度が多いという結果を報告している。この実験結果から推察すると、犬は未知の人との相互作用を生むきっかけとなるものの、夕食を共にしたりする友人関係までには人間関係を発展させる要因とはならないということなのであろうか。ペットが人間関係の形成に及ぼす影響については、今後調査していくべき課題の一つであろう。

次に、犬を飼うことは身体的健康と精神的健康の向上に直接結びつかないという結果は、非飼育者に比べて、ペット飼育者の方が健康であり、ペット飼育は身体的あるいは精神的健康を導く効果があると結論づけた先行研究 (e.g. Friedmann et al, 1980: Akiyama et al., 1986-7: Siegel, 1990: Serpell, 1991: Anderson et al., 1992: Friedmann & Thomas, 1995: Fritz et al., 1995: Jessen et al., 1996) の結果と一致しないが、この要因の一つとして、本調査と先行研究における健康度の測定方法や調査対象者の条件といった方法論的な違いがあることが考えられる。今回の調査では、身体的健康度を計るのに、自己評価による現在の健康状態という数値を用いた。これに対して、例えば、Akiyama et al.(1986-7)や Serpell(1991) は不眠や体の痛み、食欲など、生理的な症状の有無で身体的健康度を表わしており、Anderson et al. (1992) はペット飼育者と非飼育者の血圧やコレステロール値を測定し比較している。自己評価による現在の健康状態は主観的なものであり、生理学的観測に基づいた客観的な数値とは異なる。また、日常生活を送る上で自覚することの少ない血圧やコレステロール値といった体の変化が、総合的な現在の健康状態を評価する上で、どの程度影響してくるのか疑問である。

調査対象者についても、本調査と先行調査ではその条件が異なる。先行研究では、心臓病患者 (Friedmann et al, 1980: Anderson et al., 1992: Friedmann & Thomas, 1995)、アルツハイマー患者 (Fritz et al., 1995)、夫を亡くした未亡人 (Akiyama et al., 1986-7)などを調査対象にしている。さらに、調査テーマにおいても、うつ病の低下 (Jessen et al., 1996)や死亡率 (Friedmann et al, 1980: Friedmann & Thomas, 1995)、病院へ通う回数 (Siegel, 1990)など、生理学的研究が多い。しかし、今回の調査は、日本全国からランダムに抽出された日本人を対象に収集したデータを分析するという手法を取り、一般家庭におけるペット飼育の効果を検証している。犬を飼っている人と飼っていない人で身体的健康度あるいは精神的健康度に差はないという今回の分析結果は、特定の病気や精神的に苦痛を受けた経験を持つという条件無しに、ランダムにサンプリングされた被験者を対象にアンケート調査を行った先行研究 (e.g. Garrity et al., 1989: Stallones et al., 1990: Watson & Weinstein, 1993: Staats & Horner, 1999) の結果と一致していることから、以上のような調査方法における違いが分析結果の違いを導いた要因の一つと推察できる。

さらに、生理学的先行研究と異なる結果が導き出されたことは、身体的あるいは精神的障害を持った人にとって、ペットを飼うことは健康の回復に効果があるが、そうでない人にとっては効果がないことを示唆している。あるいは、健常者に比べて、身体的あるいは精神的障害をもった人はペットに対する愛着が強いため、ペットを飼うことが健康の向上につながるという解釈もできる。今回の調査結果から結論を導くことは難しいが、ペットのもたらす効果を究明する上で、この点についてさらに調査していきたい。

犬の飼育は健康を高める要因ではないという結果と同様に、犬に対する愛着度に関する結果も、健康度の向上や低下に影響するという点で先行研究 (Ory & Goldberg, 1983: Bolin,

1987: Garrity et al., 1989) と一致する。犬が飼育者の身体的健康を向上させる要因の一つとして、Friedmann et al. (1980) や Anderson et al. (1992) は犬の世話に伴う運動量をあげている。JGSS-2001 には誰がペットの世話をしているのかを尋ねる設問項目は含まれていないため、回答者本人が犬の世話をしているのかがどうかは明らかにされていない。したがって、今回の調査では、運動量を伴う犬の世話という側面から身体的健康度について分析することは不可能であった。しかし、愛着度に関する設問項目の一つである「Do you consider your pet a friend?」に対して、ペットの世話をしている人は「Yes」と回答する割合が多いことを発見した Stallones et al. (1989) の調査結果を引用すると、ペットに対して強い愛着を感じている人はペットの世話をしている割合が多いと推測できる。したがって、犬への愛着が強い人は、散歩などの運動を伴う世話に多く携わることによって身体的健康度がより高まるという解釈は可能であろう。さらに、JGSS-2000 のデータを用いて飼育者がペットと過ごす時間について調べた筆者(2002b)の分析では、男性に比べて女性の方がペットと過ごす時間は長く、男性では就業や結婚によってペットと過ごす時間が減少するが、女性では就業や婚姻の有無にかかわらず、ペットと過ごす時間は長いという結果が導かれた。総体的に犬と過ごす時間が少ない男性飼育者にとっては、犬に対する愛着の強さが犬と過ごす時間の長さを決める要因となっており⁽⁶⁾、女性に比べて、愛着の強さによる身体的健康度への影響が出やすく、また、犬を飼っていない人に比べて、犬に対する愛着が弱い人は健康度が低くなるのではないだろうか。

精神的健康度については、男性に比べて、女性で犬に対する愛着度の影響が顕著に見られる。Miller & Lago (1990) と Stallones et al. (1990) の調査では、ペットに対する愛着度と精神的健康度との関係は認められなかった。一方、Garrity et al. (1989) の調査では、ペットに対する愛着度と精神的健康度との関係が認められた。しかし、いずれの研究分析においても、性別による違いについては言及されていないため、これらの結果を基に今回の調査結果を考察することは難しい。Staats et al. (1996) は、コミットメントを「私財の出費を招くことになっても、ペットの飼育を放棄しない決意」と定義して、ペットに対する愛着度との関係を調査し、コミットメントの度合いはペットに対する愛着度で予測できるという分析結果を得た。この調査結果を参考にすると、男性に比べて、犬に対する愛着が強い女性では、精神的健康度に影響がより現れやすいのかもしれない。筆者(2002c)がJGSS-2000のデータを用いて、同居世帯人数と同居している子どもの有無がペットに対する愛着度に及ぼす影響について調査した結果では、同居している家族の人数が少なく、同居している子どもがいない家庭で、女性飼育者のペットに対する愛着度が高くなることが明らかになった。今回の調査では、このような犬に対する愛着度に影響する要因との関係から分析を行ってはいないが、性別による差と共に、ペットの愛着度に影響を及ぼす要因を視野に入れた補足調査が必要であろう。

最後に、犬を飼育することは身体的健康と精神的健康を高める要因とはならないが、犬

に対する愛着の強さは身体的健康と精神的健康を高める要因となるという結果は、犬の飼育ではなく、他の要因が飼育者の健康に影響することを提示すると同時に、犬を飼うことと犬に愛着を持つことは全く別のものであることを明示している。Gammonley & Yates (1991) は、「人と動物の絆」について、人と動物の間に成立する特別な関係であり、人が動物に対して強い精神的愛着を感じた時に発展していくと定義している。このように、愛着は「人と動物の絆」を定義する上で中核となる概念である。総理府(2002)の調査報告によると、日本人がペットを飼う理由として、「気持ちがやわらく(まぎれる)から(46.2%)」、「子どもの情操教育のため」(21.2%)という項目が上位にあがっている。しかし、犬を飼うだけではこのような効果は期待できない。犬を飼育するにあたっては、世話や触れ合を通じて犬との間に精神的な結びつきを持つことが、身体的健康のみならず、精神的健康を高めるのに必要だということを認識するべきである。

5. 結び

本稿では、家庭における犬の飼育の有無及び犬に対する愛着度が日本人の身体的健康と精神的健康に及ぼす影響について、JGSS-2001 のデータを用いて分析してきた。そして、犬を飼育することは飼い主の身体的健康と精神的健康を高める要因とはならない、犬に対する愛着の強さは飼育者の身体的健康と精神的健康に影響する要因となる、という結果が導かれた。今回の調査は今後の研究課題を多く提示する結果となったが、人と動物の関係に関する調査が日本においては少ないという現状において、日本人とペットの関係の解明を試みたという点で意味があろう。また、ペット飼育の有無と健康に関する欧米の先行研究の結果に差が見られる要因として、調査方法の違いと共にサンプル数が少ないことが指摘されているが(Raina et al., 1999)、JGSS-2001 のデータを用いた本調査は、日本人とペットの関係を理解するのに十分なサンプル数に基づいた調査であるという点においても価値がある。日本人とペットの関係について解明するべき点はまだ多く残されている。犬の飼育の有無と犬に対する愛着度が健康に及ぼす影響という点について検証した今回の調査の補足研究、並びに他の観点から人と動物の関係を調査した研究が今後期待される。

本稿は、平成 13 年度大阪商業大学研究奨励助成費の補助を受けている。

[注]

- (1) 犬のみを飼育している 428 人の内、室外犬のみ飼育しているのは 264 人(男性 134 人、女性 130 人)、室内犬のみ飼育しているのは 153 人(男性 66 人、女性 87 人)、室外犬と室内犬の両方を飼育しているのは 11 人(男性 6 人、女性 5 人)であった。
- (2) JGSS-2001 では、生活面の満足度に関する設問項目には「仕事の満足度」の項目が含まれていないが、就業者に対して仕事の満足度を尋ねる設問、そして就業はしていないが家事

に従事している人に対して仕事としての家事の満足度を尋ねる設問があり、共に「満足している(=1)」、「どちらかといえば満足している(=2)」、「どちらともいえない(=3)」、「どちらかといえば不満である(=4)」、「不満である(=5)」、そして「わからない(=6)」の選択肢が与えられている。そこで、就業者については仕事の満足度の設問に対する回答を、就業はしていないが家事に従事している人については家事の満足度の設問に対する回答を仕事の満足度を表す数値とすることを考慮した。しかし、男性飼育者で70歳以上の就業者及び家事従事者の数は4人となり、年齢及び性別による分析が困難になるため、本調査では、精神的健康度変数から「仕事の満足度」を除いた。

- (3) この内、配偶者と離死別しているのは、飼育者で40人、非飼育者で235人であった。
- (4) 別居あるいは死別した子どもの数も含まれている。
- (5) JGSS-2001のデータ分析によると、男女共に犬に対する愛着度と犬と過ごす時間に相関関係が認められる。男性では相関係数 $r=.285$ ($p<.001$)、女性では相関係数 $r=.289$ ($p<.001$) となった。

[参考文献]

- Akiyama, H., Holtzman, J. M., & Britz, W. E., 1986-7, "Pet ownership and health status during bereavement," *Omega*, 17, 187-193.
- Anderson, W. P., Reid, C. M., & Jennings, G., 1992, "Pet ownership and risk factors for cardiovascular disease," *The Medical Journal of Australia*, 157, 298-301.
- Beck, A. M., & Meyers, N. M., 1996, "Health enhancement and companion animal ownership," *Annual Reviews*, 17, 247-257.
- Bolin, S. E., 1987, "The effects of companion animals during conjugal bereavement," *Anthrozoos*, 1, 26-35.
- Freidmann, E., & Thomas, S. A., 1995, "Pet ownership, social support, and one-year survival after acute myocardial infarction in the cardiac arrhythmia suppression trial (CAST)," *The American Journal of Cardiology*, 76, 1213-1217.
- Freidmann, E., Katcher, A. H., Lynch, J. J., & Thomas, S. A., 1980, "Animal companions and one-year survival of patients after discharge from a coronary care unit," *Public Health Reports*, 94, 307-312.
- Fritz, C. I., Farver, T. B., Kass, P. H., & Hart, L. A., 1995, "Association with companion animals and the expression of noncognitive symptoms in Alzheimer's patients," *The Journal of Nervous and Mental Disease*, 183, 459-463.
- Gammonley, J. & Yates, J., 1991, "Pet projects: Animal assisted therapy in nursing homes," *Journal of Gerontological Nursing*, 17, 12-15.
- Garity, T. F., Stallones, L., Marx, M. B., & Johnson, T. P., 1989, "Pet ownership and attachment as supportive factors in the health of the elderly," *Anthrozoos*, 3, 35-44.
- Hart, B., Hart, L., & Bergin, B., 1987, "Socializing effects of service dogs for people with disabilities,"

Anthrozoos, 1, 41-44.

井本史夫, 2001, 「集合住宅でペットと暮らしたい」, 集英社.

Jessen, J., Cardiello, F., & Baun, M. M., 1996, "Avian companionship in alleviation of depression, loneliness, and low morale of older adults in skilled rehabilitation units," *Psychological Reports*, 78, 339-348.

Mallon, G. P., 1994, "Some of our best therapists are dogs," *Child & Youth Care Forum*, 23, 89-101.

Miller, M., & Lago, D., 1990, "The well-being of older women: The importance of pet and human relations," *Anthrozoos*, 3, 245-252.

Ory, M., & Goldberg, E., 1983, "Pet ownership and life satisfaction in elderly women," In A. H. Katcher & A. M. Beck (Eds.), *New perspectives on our life with companion animals*, 803-817, University of Pennsylvania Press.

Raina, P., Waltner-Toews, D., Bonnett, B., Woodward, C., & Abernathy, T., 1999, "Influence of companion animals on the physical and psychological health of older people: An analysis of a one-year longitudinal study," *JAGS*, 47, 323-329.

Serpell, J., 1991, "Beneficial effects of pet ownership on some aspects of human health and behaviour," *Journal of the Royal Society of Medicine*, 84, 717-720.

Siegel, J. M., 1990, "Stressful life events and use of physician services among the elderly: The moderating role of pet ownership," *Journal of Personal and Social Psychology*, 58, 1081-1086.

総理府広報室(編), 2000, 「動物愛護 月刊世論調査」, 32, 79-141.

Staats, S., & Horner, K., 1999, "Allocating time to people and pets: Correlates with income and well-being in a Midwest community sample," *Journal of Psychology*, 133, 541-552.

Staats, S., Miller, D., Carmot, M. J., Rada, K., & Turnes, J., 1996, "The Miller-Rada commitment to pets scale," *Anthrozoos*, 9, 88-94.

Stallones, L., Marx, M., Garrity, T. F., & Johnson, T. P., 1990, "Pet ownership and attachment in relation to the health of U.S. adults, 21 to 64 years of age," *Anthrozoos*, 4, 100-112.

Stallones, L., Marx, M., Garrity, T. F., & Johnson, T. P., 1989, "Attachment to companion animals among older pet owners," *Anthrozoos*, 2, 118-124.

杉田陽出, 2002a, 「ペットのいる生活：室内犬からザリガニまで」, 岩井紀子・佐藤博樹(編)『日本人の姿：JGSSにみる意識と行動』, 281-287, 有斐閣選書.

杉田陽出, 2002b, 「日本人のペット飼育時間に影響を及ぼす要因について：飼育者の属性を中心として」, 大阪商業大学論集, 126, 51-64.

杉田陽出, 2002c, 「JGSS-2000のデータにみる同居世帯人数がペットの評価に及ぼす影響：同居している子どもの有無の観点から」, 大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所(編)『日本版 General Social Surveys 研究論文集：JGSS-2000で見た日本人の意識と行動』, 135-148.

杉田陽出, 1999, 「なぜ人は動物とふれあうのか: 人と動物のコミュニケーションを考える」, 大阪商業大学論集, 112-113, 737-755.

Watson, N. L., & Weinstein, M., 1993, "Pet ownership in relation to depression, anxiety, and anger in working women," *Anthrozoos*, 6, 135-138.

横山章光, 1996, 「アニマル・セラピーとは何か」, 日本放送出版協会.